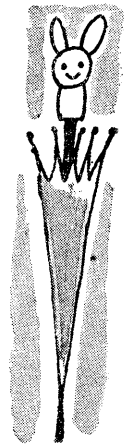


出会い、それから……



岸田今日子

そのころ私は父のすすめ、というより命令で、舞踊とフランス語の勉強をしていました。

「このまま女優になるには若すぎるし、何も知らなさすぎる」と父はいったのでした。

私は週三回アテネフランセへ、週一回、内藤濯先生のお家へ通って、フランス語を教えていただくことになりました。

内藤先生は、そのころもう七十に届くほどのお年で、父と私とは二代にわたって生徒にしていたのです。日本のフランス文学界の草分けでいらっしゃる先生が、私のような生徒をおとりになるのは、さぞご迷惑だったろうと思わずにはいられません。全くの初歩の上に語学的天分はゼロ、怠け者に加えてフランス語に対する興味は全くないという、箸にも

棒にもかからない生徒を、先生はいやな顔一つなさらずに、根気よく教えていただきました。そんなある日、

「今度これを訳すことになりました」

と見せて下さったのが『星の王子さま』でした。表紙には、一度見たら忘れられない、素朴で優しい顔をした金髪の子どもが描いてありました。パラパラめくってみると、短い会話など、私の習いたてのフランス語でもわかる所があっというらしくなりました。

内藤先生と石井桃子さんの共訳が出るのを待ちかねて読んだあの本が、私を子どもの本に結びつけるきっかけになったのです。

それまでの私は、小さい時からの濫読の癖がついていて、

大人の本を背伸びして読むのに慣れていました。でも、こんなふうに一冊の本が、その作品が、出て来る人たち、動物たち、花たちが、身近に感じられたのははじめてでした。それから私の楽しみは、本屋さんの一隅でしつこくねばって、子どものために書かれた魅力的な本を見つけることになったのです。

A・ミルンやファージョンにも、メアリー・ポピンズや『ぐりとぐら』、森の中を散歩していた『ぼく』にも会いました。子どもの本が好きだという人と話しはじめると、時間のたつのを忘れました。その一人の小池朝雄は、内藤先生が持っていていらした詩の朗読の時間の生徒でした。もう十年になりますが、先生の八十歳のお祝いに『星の王子さま』を、ジュエラル・フィリップが作ったレコードからヒントを得て、テープに吹き込んでさし上げようということになりました。朝雄と二人で、カットする部分や配役を決めたり、もちろん自分たちが「私」と「王子さま」になることにしたり、録音スタジオを借りたり、仲間をただで出演させたりして、一時間位のテープを作りました。内藤先生は、本当に喜んで下さいました。

朝雄と私は調子に乗って、今度は『くまのプーさん』はど

うだろうということになりました。いろいろな配役を決めているうちに、「プーさんは？」と朝雄がいました。私は当然自分だと思っていたので、啞然として彼の顔を見ました。彼は「あーあー」と低い声を出してから、「プーさんはこういう声だと思うなあ」といいました。私は黙ってしまいました。それ以来、二人の間でその話題が出なくなったのは残念です。でも、今年の夏休みから、子どものための芝居を一緒に作ろうと張り切っています。

五年前、母親になって、それでも私は本屋さんに行く、自分のために子どもの本を選んでいろいろです。子どもがその本をどんなふう喜ぶか、興味はありますけれども、やっぱりだれでも自分で自分の好きなものを見つけて行くのだと思います。ただ、そのきっかけが、どんなふうやって来るかだと思ふのです。私の場合、あの時内藤先生に出会ったからといえるのでしょうか。それともサン・テグジュペリに、星の王子さまに、もしかしたら、私の中にいて、自分では知らなかった私に出会ったのでしょうか。

(女優)